

「人の子が現われる日」

2015年10月26日

ルカによる福音書 17章 26節～37節。ノアの時代にあったようなことが、人の子が現れるときにも起こるだろう。ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていたが、洪水が襲って来て、一人残らず滅ぼしてしまった。ロトの時代にも同じようなことが起こった。人々は食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたりしていたが、ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降ってきて、一人残らず滅ぼしてしまった。人の子が現れる日にも、同じことが起こる。その日には、屋上にいる者は、家の中に家財道具があっても、それを取り出そうとして下に降りてはならない。同じように、畑にいる者も帰ってはならない。ロトの妻のことを思い出しなさい。自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである。言うておくが、その夜一つの寝室に二人の男が寝ていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。二人の女が一緒に臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。」そこで弟子たちが、「主よ、それはどこで起こるのですか」と言った。イエスは言われた。「死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ。」

キリスト教信仰は、主イエスの十字架と復活によって、互いの命を愛し平和に生きる「神の国」が「既に」到来したことを信じる信仰である。その「神の国」は信仰において見るのであって、「未だ」完全なものとしては受け取っていない。完全な「神の国」は主イエスの再臨、終末時に与えられる。私たちは「既に」と「未だ」の間時にある。終末時の完成を望んで「今」を希望とユーモアを持って「神の国」の住人として生きるのである。

上記の御言葉では、終末時を「人の子（メシア）が現われる日」と神話的に表現している。ノアの時代、ノアと家族が箱舟に入る日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。洪水が突然襲い、一人残らず滅ぼされてしまった。ロトの時代も、人々は食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたりしていた。ロトと家族がソドムから出て行った日に、火と硫黄が天から降って来て、一人残らず滅ぼされてしまった。人の子が現われる終末の日にも、同じように突然来る。その日には、屋上にいる者は、家の家財道具を取り出そうと、下に降りてはならない。畑にいる者も帰ってはならない。ロトの妻は、振り返ってはならないと忠告されながら、振り返ったために塩の柱になったことを思い出しなさい。自分の命を生かそうとする者は失い、命を失う者はかえって保つ。終末の日には、寝室に二人の男が寝ていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。「連れて行かれ」は天に迎えられるということで、「残される」は地上で滅ぼされるということであろう。主イエスは、歴史の終りには羊と山羊を右と左に分けるように、人を「救い」と「滅び」に二分する裁きがあると言われた。恐れた弟子たちは「主よ、それはどこで起こるのですか」と尋ねたところ、「死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ」と言い、場所や時を答えず、滅ぼされた死体に群がるはげ鷹の恐怖を語っている。聖書は、終末時には人々を厳しく峻別する裁きを、絵画的な神話的表現で書いている。神信仰に忠節を尽くせという教育的勧めであろう。ヨハネ黙示録の最後は「アーメン、主イエスよ、早く来てください」と主イエスの再臨を待ち望む言葉で終わっている。終末は裁きの恐怖におののくのではなく、「神の国」の完成を喜び、待望する日である。